

「第3のアスリートのキャリア形成に関する実証的研究」 研究経過報告

浜田雄介

要旨

本研究の目的は、一概にプロともアマチュアとも分類できない「第3のアスリート」のキャリア形成の実態を明らかにすることにあった。そのための方法として、本研究ではトライアスロンのエリートカテゴリーで活動していた元選手へのインタビューを実施した。研究の進展に伴って、第3のアスリートのキャリア上のターニングポイントにおける、言葉ではその理由を説明しきれない選択について考察することの重要性が示された。

キーワード：スポーツ社会学、第3のアスリート、キャリア形成、トライアスロン、選択

1. 研究の背景と目的

企業運動部の衰退、地域密着型プロスポーツやクラブチームの拡大、世界レベルで争う競技種目の多様化など、国内のアスリート（スポーツ選手）を取り巻く環境は近年大きく変化している。そのなかで、研究代表者によるこれまでの研究〔京都産業大学総合学術研究所特定課題研究（準備研究支援、課題番号：E1818）〕から重要な論点として浮上したのが、一概にプロともアマチュアとも分類できない「第3のアスリート」の存在である。

第3のアスリートについてその特徴の一端を挙げると、例えば彼ら／彼女らのなかには競技を通じた収入だけでは生計を立てられない、あるいはそもそも競技から収入を得ていない者も多い。また華々しく活躍するトップアスリートになれる見込みも薄い。それにも関わらず、場合によってはアルバイトなどをしながら、競技第一の生活を送っている。要するに、個々に程度の差や状況の違いこそあれ、第3のアスリートのキャリアは競技と競技生活を支える活動とで複線化した、不安定で将来の見通しが立ちにくいものになっていると考えられるのである。

もし第3のアスリートが増加傾向にあるのだとすれば、それに伴って競技引退後のセカンドキャリアへの移行時に生じる不適応や、競技成績の不振などから自分を見失うバーンアウトといったアスリートのキャリアに特徴的な問題が深刻化していく可能性も想定される。しかしその存在が認識され始めて間もないこともあり、第3のアスリートのキャリアについて論じた社会学的研究は一部¹⁾を除いてほとんど行われていない。したがって本研究では、第3のアスリートのキャリア形成の実態を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の経過

第3のアスリートのキャリア形成の実態に迫るために、本研究ではライフストーリー法によるインタビュー調査を実施した。ライフストーリー法では聞き手と語り手が双方向的にやりとりを重ねることで、語り手の人生を一連の物語として捉えられるようになる。また人生に対する考え方や経験への意味づけなどといった語り手の主観に焦点をあてるため、第3のアスリートのキャリアにおける外形的にはわからない側面を理解するのにも有用な方法だと考えられた²⁾。

本研究の経過の要点として、ここではあるトライアスロン選手（A選手とする）に対するインタビューの内容にふれておこう。オリンピック代表選手なども含まれるエリートカテゴリーで活動し、2019年に競技の第一線から退いたA選手は、採用が決まっていた教職の道を断ち、所属先などのあてもないままスポーツの世界で生きることを選んだ第3のアスリートである。なおA選手にはこれまでの研究でも調査協力を得ており、前回のインタビュー以降のキャリアの経時的な変化を追うべく、本研究でも協力を依頼した。

A選手の事例で特徴的なのは、キャリア上のターニングポイントにおける選択の理由が、明晰な説明のうちに収まりきらないこと（物語れなさ）である。このことが顕著な引退という選択の概要を述べると、彼はアスリートとしてのピークを過ぎたわけでも、経済的な問題を抱えていたわけでもなかった。加えて前回のインタビューでは数週間後に控えた記録会で自己ベストを出せると、競技への前向きな展望さえ口にしていて、しかしその後、家庭や所属先でもある職場の環境の変化、自分よりも若い選手の台頭などをきっかけに、A選手は自身の競技生活のあり方を問い直すようになった。そして最終的に、彼はこれ以上競技を続けるのは「無理」だと感じ、前述の記録会に出場しなかったのである。

「たぶんなんで（競技を）やっているのかを明確にいえる人は、なんでやめるのかも明確にいえるんでしょね」との語りからわかるように、A選手は自分が引退した、あるいはアスリートになった理由を説明しきれないことに自覚的である。またA選手は、「言葉にしてしまうと、ほか（言葉にならないところ）が疎外されちゃう」「言葉にしちゃった時点で、なんかそれ（選択）が違うものになる」とも述べている。そしておそらくもっとも重要なのは、A選手がそのような選択に「納得」し、気持ちも「すっきり」しているということである。なぜならアスリートのキャリア上の問題は、端的には競技に対する「ケリ」や「くすぶり」に起因しており³⁾、この意味で「納得」とはアスリートのキャリア形成を左右する要因だと考えられるからだ。これらのことから、第3のアスリートのキャリア形成の実態を論じるには、彼ら／彼女らのキャリア上のターニングポイントにおける選択の基準に関する理論が補完されなければならないだろう。

3. 今後の研究の展開

第3のアスリートの選択の基準を分析する手がかりになるのが、ベルクソン [2010] による「表層の自我」と「深層の自我」の区別である。表層の自我とは、例えば社会状況Aには自我aが、社会

状況Bには自我bがというふうに、特定の社会状況と結びついた等質的で分割可能な自我のことであり、その選択には決定論的な説明が可能となる。それに対して、深層の自我とはいろいろな観念や感情が相互に浸透し合い、刻一刻と変化し続けている自我のことを指している。ゆえに深層の自我が行う選択は、それがどの観念や感情からもたらされたのかを特定して説明することができず、強いていえば人格全体に要因を求めるしかないような不意に出現するものとなる⁴⁾。

ところで、上記の自我の区別やそれぞれの選択の違いは、自由の問題と深く関係している。ベルクソンは「言語によっては、決して、自由を表現することはできない」[ベルクソン, 2010: 212]と明言する。この場合の自由とは、予見可能な何かに支えられたり根拠づけられたりしていない点で「決定的に自己根拠的」[檜垣, 2000: 75]であることだと考えられる。単純化を恐れずにいえば、もし私たちが自由でありたいと願うならば、それは一般性に還元される表層の自我ではなく、深層の自我の選択の固有性において実現されるのである。

A選手は自身の競技生活を問い直したときのことを振り返って、「そのまま続けていたら、踏ん張っていたら、なんか普通やなって」と感じたと言っている。たとえ苦しさや迷いが生じても（特定の社会状況）、アスリート（表層の自我）なら競技を続けて自分の限界を突き詰めるのが「普通」（一般性への還元）だろうという選択を、A選手はすることができなかった。反対に「なんでやめたんだろう」と言葉に詰まるような引退に「納得」できるのは、それが彼にとって「自分にしかできない」（固有性）自由な選択だったからではないだろうか。今後は以上の仮説的な見直しをもとにベルクソンの理論とA選手のライフストーリーをさらに精査し、本研究の成果として公開する予定である。

最後に、関連するそのほかの研究活動について補足しておこう。第3のアスリートが置かれた社会的状況に関する文献研究の一環として、「ギデンズの後期近代社会論における「存在」について」と題した研究会報告を行った（2019年度第4回分身の会、於龍谷大学大宮キャンパス）。この報告では『モダニティと自己アイデンティティ』[ギデンズ, 2005]を中心的な題材として、まずギデンズが論じる後期近代における自己の問題が、表層的な生きにくさではなく生そのものをおびやかす存在の次元にあることを確認した。それとともに、学問上の立場ゆえにギデンズが自己の問題を乗り越えていく人間の生の力を論じられないという限界を抱えていることを示唆した。第3のアスリートの選択とはまさにこの限界を超えたところに位置づくものであり、本研究の成果がどのように社会学全般と接合するのかも併せて考察していく必要があると思われる。

また特にA選手のような地方を拠点とする第3のアスリートにとって、ローカルな大会は非常に重要な活動の場である。したがってこれまでの研究に引き続いて、本研究ではトライアスロン大会の運営について調査を行った。そしてその継続的な成果の一部を拙稿[浜田, 2020]にまとめた。そのほかにも、トライアスロン選手の全般的な競技環境やキャリア選択の実情を把握するために、公益社団法人日本トライアスロン連合で選手の強化育成を統括しているB氏へのインタビューを実施した。今後は例えば国内のトライアスロン選手たちのなかでA選手の事例がどのように相対化されるのかといったことを、検討課題としていかなければならないだろう。

注

- 1) かならずしもキャリアを主題にしたものではないが、野球選手を対象とした石原の研究 [2013, 2015] における「[自分探し]型」や「ノマド・リーガー」の事例を挙げることができる。
- 2) ライフストーリー法の説明については木戸 [2019] を参照した。
- 3) セカンドキャリアへの移行が「ケリ」に、バーンアウトが「くすぶり」(「空回り」) にそれぞれ対応している [小丸, 2018]。
- 4) 「表層の自我」と「深層の自我」の説明については作田 [1998] を参照した。

付記

本研究は京都産業大学総合学術研究所特定課題研究(準備研究支援、課題番号:E1914)の助成を受けたものである。

文献

- ベルクソン, H. (竹内信夫訳), 2010, 『新訳ベルクソン全集 1 意識に直接与えられているものについての試論』, 白水社.
- ギデンズ, A. (秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳), 2005, 『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会—』, ハーベスト社.
- 浜田雄介, 2020, 「スポーツイベントにおけるボランティアとは—全日本トライアスロン皆生大会を事例として」, 石坂友司・井上洋一編, 『未完のオリンピック—変わるスポーツと変わらない日本社会』, かもがわ出版, 188-210.
- 檜垣立哉, 2000, 『ベルクソンの哲学—生成する実在の肯定—』, 勁草書房.
- 石原豊一, 2013, 『ベースボール労働移民—メジャーリーグから「野球不毛の地」まで—』, 河出書房新社.
- 石原豊一, 2015, 『もうひとつのプロ野球—若者を誘引する「プロスポーツ」という装置—』, 白水社.
- 木戸彩恵, 2019, 「ライフストーリー (life story)」, サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編, 『質的研究法マッピング—特徴をつかみ、活用するために—』, 新曜社, 23-29.
- 小丸超, 2018, 『近代スポーツの病理を超えて—体験の社会学・試論—』, 創文企画.
- 作田啓一, 1998, 「2 持続する生命 (H. ベルクソン)」, 作田啓一・木田元・亀山佳明・矢野智司編, 『人間学命題集』, 新曜社, 12-18.

An Interim Report about a Study on Third Athletes' Career Formation

Yusuke HAMADA

Abstract

This study aims to explore the reality of career formation of “third athletes” who are neither professional nor amateur. An in-depth interview was conducted with an ex-elite triathlete, and the analysis revealed that he made the career choice at his career's turning point based on the reasons that cannot be explained explicitly with words. This indicates an importance of further investigation on such unexplainable reasons in terms of third athletes' career formation.

Keywords: Sport sociology, Third athletes, Career formation, Triathlon, Choice